

## 大谷学会秋季公開講演会要旨

## シエリと漱石

大野 幸子

シエリの漱石にあたえた影響がたどられるのは主として初期の作品―短篇、「草枕」、英詩―に於てであるが、本格的写実小説にとりこんでいた後期の漱石に於ても、シエリと比較出来る浪漫的一面は決して皆無ではない。即ち初期の浪漫的傾向は後期に於て内面に沈潜し、同時にシエリへの愛も内向化した。明治二十七年八月、松島に「シエレー詩集」をたづさえた旅路に於ける漱石と大正三年「心」執筆当時纏綿とした天界に人をおびき出す作品を受てた漱石との間にはさして開きがない。が、問題を初期の作品にのみ限って観察することと先づ「草枕」がクロージ・アップされる。この作品は漱石の俳諧趣味が表に出たものといわれるが別の見方をするとシエリ的である。両者―シエリ、漱石―のバラレルは冒頭の雲雀の詩にとどまらず、この「腹からの笑に苦しみのこもる」というシエリの詩想は「草枕」全体のアンダートーンをなしている。女主人公那美さんの美の極致は美とビティとの両面が表われる瞬間にのみ可能となるし、完全美の中にそれを否定する要素に注目したえずそれについて指摘しようとし

たシエリの心がこの作品の重要な支柱となっている。尚この作品で余情や余音を特に強調しているがそれは浪漫派の中でも特にシエリに根強い傾向であり例えば、*"Music when soft voices die"*等の抒情詩が想起される。消えかかろうとするたゆとう命に絶大な価値を認めたシエリの心は、漱石が「文学論」にその全文を引用した *"Stanza Written in dejection near Naples"* にも顕著である。「草枕」の「死なんとしては、死なんとする病夫の如く、消えんとして消えんとする燈火の如く、今己むか己むか、とのみ心を乱す此歌の思いには、天下の春の恨みをことごとくあつめた調べがある」等は、特にシエリを思わせる。

漱石は美女の形容にあたって天体のイメージを多く用いた。例えば、「擦めき渡る春の星の暁近くに、紫深き空の底に陥いる趣きである」といつた風に、シエリは浪漫派の中でも特に宇宙的イメージを好み、それを豊富に使ひこなした。シエリの本領が発揮されるのは美女の形容に於てである。例えば「エビスイキデオン」で月、星にたとえられたメアリアやエミリイ、Adonais「アドネイス」で暁の星となつてまたたくキーツ等限りがない。「草枕」のいわゆる「非人情」の世界は西歐詩人の近づき難い日本的境地であるかも知れないが、この点から見てもシエリ程情の世界の純粹性に埋没出来た詩人、東洋的情趣に接近出来た詩人は珍しく、又、逆に言つて、シエリは俳句や漢文の教養につちかわれた青春期を持つ漱石が最もやすやすと入つていける詩人だったのでないか、「草枕」以外の作品即ち「幻影の盾」や「薙露行」等にもシエリと漱石とのバラレルを求めるのは困難でない。例えば漱石の他界描写とシエリの地上の天国の描写は重なりあうところが多

く、その他界なり天国などにゆきつく舟旅の描写にも似通う点が多いのである。シエリの「プロメシウス、アンバウンド」等はこの点大いに漱石の参考になったのではなからうか。「プロメシウス・アンバウンド」を漱石が精読したばかりでなく、それについて深い研究をしていたことはロンドン滞在中彼が教えを受けたクレイグ氏からロゼッティの“A Study of Prometheus Unbound”をわざわざ借りて読んでいることや、同氏との文学談義にたえず、シエリを話題にしたこと等からも明らかである。又、漱石の浪漫主義は決して夢のみをみつめてのものではなく夢のアニチテーゼとしての現実についての意識乃至自覚にたえず裏づけられていた。それだからこそ彼には後年の写実小説が可能だったわけであるが、同様にシエリの浪漫主義にも現実の諸問題に対する関心が強い裏づけとなつてあらわれていた。両者とも暴力否定を主張し無血革命を唱導した。シエリの論文集と漱石の「二百十日」を読めば二人のこの意味に於ける共通性がよくわかる。「二百十日」は「野分」白井道也に、又「猫」にもひきつがれて漱石の一面を語っている。もっとも漱石の政治的関心はシエリの場合のように一貫したものに発展することはなかった。

次に漱石の英詩をシエリの詩と対比してみるといくつかの点に興味が湧く。イメージの類似は両者に於て顯著であるが漱石の詩は静的で想像力にとぼしく、美女に黄金の髪、大理石の腕、雪の如き胸をあたえても、又彼女を星の光の中に浮き出させてみて、そこには生命がなくただ概念のみが形骸化している。シエリの現実飛躍、それによる詩的眞実への接近はなく、実体を缺く美女に当然靈的身軽さをあたえねばならぬのにそんな配慮も一切な

い。しかし、表面的技巧に関する限り類似はイメージにとどまらず二つのスピリットを対立させ問答させる形式といい又好んでコントラストを用いた点といい激した感情が急に冷却してそこに断層の生じる状態をよんだ詩といい全く類似している。思うに漱石の英詩は成功作とはいえずシエリから借用した技法を充分生かすことなく、彼は英詩の世界とたもとを分つたものと思われる。とにかくシエリが漱石にあたえた恩恵は以上の諸点をはじめとして更に「文学論」での十二回にわたるシエリの引用からも、かなりなものであったと断言出来るのではなからうか。

### 否定、即、肯定の宗教

舟 橋 一 哉

仏教の要諦は「真空妙有」という言葉で表わすことができる、と言われている。この「真空妙有」を現代語で「絶対の否定はそのまま絶対の肯定である」と言いなおしてもよいと思う。それで仏教の教義において、この「否定、即、肯定」ということが、どのような面にあらわれているか、原始仏教から親鸞に至るまでのあらゆる仏教の教えの上に、「真空妙有」がどのように示されているか、そういうことを明かにすることによって、真宗学における仏教学的基礎も明瞭になると思われる。そういうことを大体において四つの方面から眺めて見たい。

一、仏教における無形的表現と有形的表現。